日常の中から

短歌を作ることは、「日常」だろうか「非日常」だろうか。私にとってそれは、「日常の中の非日常」あるいは「日常の中からの非日常」ではないかと思う。

　何をうたうか、という大きな問題がそこにはある。そして次に、どんな言葉で、という問題。

【まず「何を」であるが、日常の中からそれを見つけ出したい、と私は思う。旅や人の生死に関わることなど、非日常から生まれる歌も多い。が、それ以外にも、①八百屋さんで買い物をするとき、ふるさとに手紙を書くとき、気のあった友人と会うとき、※エトセトラ。あっと思う一瞬の心の揺れをつかまえて、「何を」の種にする。うたわれなければその場で消えてしまうものが、うたわれることによっていつまでも残る。②三十一文字に真空パックされて。

　特異な体験や特異な感受性の上に成り立つ歌ももちろんあるだろう。が、そうでなくても、歌は生まれるのだと信じたい。感じやすい心・感じにくい心、というのはあるかもしれない。けれど、感じない心なんてないはずだ。だからすべての人の心に、歌は生まれる可能性を持っている。どんな平凡な日常の中にも、歌の種はひそんでいる。そして歌を作っていくことによって、私たちは小さな種をも敏感にキャッチできる心というものを、持つようになるのではないだろうか。

　③短歌そのものは非日常だ。五七五七七という定型において。私たちはふだん、三十一文字の会話はしない。けれど、その非日常の花を咲かせる種が日常の中にある。心を敏感にすればするほど、日常は非日常の種だらけだ――ということにも気づく。何十年生きても、まったく同じ一日などありはしないのだから。そして日常の小さな窓から、大きな宇宙がかいま見られることが、人の一生のうちには何度かあるのではないかと思う。

　次に「どんな言葉で」という問題。この点においても、私は日常派だ。ふだん、自分が使い慣れ、親しんでいる言葉をたっぷりとりこんで、うたいたい。すなわち日常の言葉で。それは、豊かな日本語の財産を無視するということではない。要するに、歌になる言葉・ならない言葉、という色分けをしたくないということである。歌の種のまわりには、それを包む言葉の土壌があるはずだ。自然に掘りおこしてゆけば、日常の言葉がくっついてきて当然ではないだろうか。

　ふだん何げなく使われている言葉が、五七五七七の中にとりこまれるとき、それは非日常の言葉になる。定型のリズムの中で、不思議な輝きを放つ。④この意味でも短歌は、日常から非日常への装置なのだと言えるだろう。】

（俵万智『りんごの涙』文藝春秋　所収「日常の中から」による）

※エトセトラ…その他。等々。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「八百屋さん……友人と会うとき」とあるが、これは日常、非日常のどちらの例か。日常なら**ア**、非日常なら**イ**で答えなさい。

〔　　〕

(2) ――線②「三十一文字に真空パックされて」とあるが、このあとに省略されている内容を、解答欄に当てはまるように本文中から七字で探し、書きぬきなさい。

三十一文字に真空パックされて□□□□□□□。

(3) ――線③「短歌そのものは非日常だ」とあるが、短歌のどのような点が非日常なのか。本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 日常にはない出来事をうたうべきであるという点。
イ 日常の中での感情からは生まれないものである点。
ウ 日常の会話と異なり、五七五七七の定型を用いる点。

〔　　〕

(4) ――線④「この意味でも短歌は、日常から非日常への装置なのだと言えるだろう」とあるが、どのような点で短歌は日常から非日常への装置だと言えるのか。適当なものを選びなさい。

ア 短歌の定型のリズムの中では、ふだん使い慣れている言葉が、不思議な輝きを放つ非日常の言葉となる点。
イ 平凡な日常の出来事を歌にするときにも、ふだんはあまり用いられることのない特異な言葉が使われる点。
ウ 歌の種のまわりには日常の言葉がくっついていても、平凡な日常の中には歌の種は見いだされない点。

〔　　〕

(5) 【　】の箇所を大きく二つのまとまりに分けたとき、一つ目のまとまりはどこまでか。一つ目のまとまりの最後の五字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□□□